

一八八二年八月二十四日(木)

タクール、聖ラーマクリシユナ、ドツキネーシヨル南神の寺院で信者と共に

女と金ががじやまヨーガの障害、絶えざる修行とヨーガの本質

聖ラーマクリシユナは、ドツキネーシヨル南神の寺院に信者たちと共におられる。スラボン月白分十日目。キリスト暦一八八二年八月二十四日、木曜日。

この頃は、タクールのところにハズラー氏、ラームラル、ラカールたちが泊まり込んでいる。ラームラル氏はタクールの甥おいで、カーリー神殿に勤めている。校長が部屋に入ってみると、東北の長いベランダでタクールが、ハズラー氏の近くに立って話をしておられるところだった。校長は入ると床に額ぬかずいて、タクールの聖なる御足を拝した。

タクールはニコニコしておられる。校長に向かつておっしゃった。「あと二、三回、イーシユワラ・ヴィディヤサーガルに会う必要があるよ。人物画を描くときは、はじめザーツと下描きしておいてから、あとでゆっくり絵の具を塗るものだ。神像は最初にだいたいの形をつくって、次に下塗りをして、その次に白塗りをして、最後に絵の具で色どりをする——何でも順序を追ってしなけりゃならん。

イーシュワラ・ヴィデイヤサーガルはすっかり用意ができていて、ただ覆カバいがかかっているだけだ。あれこれと善い仕事をしているが——だが、自分の心の深いところに何かがあるのか、それがわかってない——奥に黄金が隠されてあるのに。心の奥に神様がいらつしやる——そのことがわかったら、仕事も何もふり捨てて、夢中になってあの御方を呼ぶ気になるよ」

タクールは校長とお立ちになったままで話をなさっているが、時々、ベランダを行ったり来たりさ
れている。

〔修行——女と金に対する欲望の嵐を振り切るために〕

聖ラーマクリシュナ「心の奥に何かがあるかわかるためには、少々修行がいるんだよ」

校長「修行は、一生し続けなければならぬものでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「いや、はじめの間は上げたり下げたり、一生懸命漕がなけりやならない。後になると、そう気張らなくてもよくなる。波や雨風や嵐のなかを進んだり、河の曲がり角を通ったりするときには、舟の真ん中に立ち上がって舵かじ棒をしっかりと握っているんだ。それが過ぎたら、そうまでしなくてもいいさ。曲がり角を無事通って追い風が吹いてきたら、その時は気楽に坐って、舵棒に軽く手を置いて——それから帆を上げてタバコを吸い始める。女と金の嵐をふり切ったら、もう気楽なものさ」

〔タクル、聖ラーマクリシユナとヨーガの本質——ヨーガの中断——ヨーガの状態〕
 ——揺れずに燃えている燈火のような状態——ヨーガの障害

聖ラーマクリシユナ「ヨーギーに適した特徴しるしを生まれながら持っている人もある。そういう人たちだつて、よくよく気を付けなくてはいけない。女と金こそがヨーガの障りだ。ヨーガの修行きうぎんを途中で止めて、俗世間に引きずり込まれてしまうことがあるが——まあ、それはきつと、この世の快樂にまだ未練が残っているせいだろうが——それをすっかり卒業おつしてしまえば、また神の方へ向かつていく。ヨーガを続けるようになるのだ。ところで、サトカ・カルカを知っているかい？」

校長「いえ、存じません。見たことがございません」

聖ラーマクリシユナ「私の郷里くにの方にあるんだよ。一端を地につけて竹竿を曲げておいて、それに釣り針を付けたヒモを結びつけてある。釣り針には餌を付けてある。魚がその餌に食いつくと、自然に跳ね上がつて竹竿は真つ直ぐになる。ちようど、高いところに竹の顔があつて、気を付けて見ているかのように、ちようどそんなふうになるんだ。

天秤計りはね、片方に重みをおくと、下の目盛りは上の目盛りといつしよに重ならない。下の目盛りは自分の心、上の針は神様。下の目盛り、上の目盛りとピッタリ重なるのがヨーガだ。

心が静まつて、しっかりと定まらなくてはヨーガにならない。世間の風が、心の炎をいつもゆらゆらさせる。心の炎が全く動ヒタリかなくなれば、正しいヨーガの状態になっているのだ。

女と金こそがヨーガの邪魔だ。ものの本質をよく判断してごらん。女の体に何があるか——血、肉、

脂あぶら、内臓はらわた、それに巣あくつている回虫、小便、うんこ、こんなものだ。そういうものの塊かたまりが、どうい
 わけで好きになるんだろうね？

私はよくラジャスの気持ちを実似たものだよ——捨てるためにね。純金のレースで飾った上着を
 着て、太い指輪を指にはめて、水煙管ぎせるをくわえてタバコを吸いたい、という望みを起こしてみた。金
 レースの上衣も着た。みんなマトウールの旦那が揃えてくれた。しばらくしてから心に言い聞かせた
 ——「心よ、これが金レースの上衣というものだ！」そして脱ぎ捨ててやった。もう関心がなくなつた
 からね。「心よ、これが肩掛ショウケルけというやつだ！」「これが指輪というものだ！」「これが水煙管ぎせるをくわ
 えてタバコを吸うということだ！」みんな投げ捨ててしまつて、もうそんなもので満足しようなんて
 気持ちはなくなつたよ」

そろそろ薄暗くなりかけてきた。部屋の南東のペランダや部屋の戸のそばで、タクールはモニと二
 人つきりで語り合つておられた。モニに向かつて——

聖ラーマクリシユナ「ヨーギーの心は、いつも神に集中たして、いつもアートマンに没入たしている。
 目が虚うつろだから見ればすぐわかる。ちょうど母鳥が卵を抱かいているときのように——全心を卵に向け
 ていて、外のことは無いと同じだ。そうだ、そんな絵が見たいんだがな？」

モニ「かしこまりました。お希望のぞみに沿まうような絵を、ぜひ探してまいりますよ」（訳註——マヘンドラ・
 グプタは、聖ラーマクリシユナの存命中にはこのような絵を探すことは出来なかつたが、後に見つけることができた。ブ
 イツソーリユーション刊行の『大聖ラーマクリシユナ』不滅コタムリトの言葉』第一巻〜第五巻の表紙を飾る絵がそれである）

師弟の語らい——秘密の話

夕暮れになった。係りのものがカーリー神殿やラーダーカーンタ神殿はじめ、あちこちの部屋に明かりをつけた。タクールは小ベッドに坐つて、大実母の瞑想から、やがて神の御名を称えておられる。部屋には練り香が焚かれている。一隅にスタンドがあつて、ランプに明かりがついている。しばらくして、ホラ貝や鈴の音がきこえてきた。カーリー神殿で夕べのお勤めが始まったのである。白分の十日なので、見渡す限りの月光である。

神殿の勤行が終わつてしばらくすると、聖ラーマクリシュナは小ベッドの上にお坐りになつたまま、モニと二人つきりで様々な事について話をされている。モニは床に坐つている。(訳註、モニ——マヘンドラ・グプタが『不滅の言葉』の中で用いている仮名の一つ)

〔君には定められた義務を行う権利はあるが、行為の結果についてはどうする権利もない〕

聖ラーマクリシュナ「無私の気持ちで何でもしなさいよ。イーシュワラ・ヴィディヤサーガルのやつていることは、ほんと善い仕事だ——無私の精神で行動するように、一生懸命努力しているよ」

モニ「はい、わかりました。あのう、仕事やいろんな活動をしていながら、神にふれることはできるものでしょうか？ ラーマ(神)とカーマ(欲望)は共存できるもののでしょうか？ いつでしたか、ヒンディー語の本を読んでいましたら、こんな言葉がありました。

ラーマの在るところに欲望なく、

カーマのあるところ、ラーマなし」

聖ラーマクリシュナ「活動は、みんながしていることだ。神の御名を称えたり、神の栄光を讃えたりすることも活動だし、梵我一如論者（ヴェーダーンタ派の信奉者）が、我はそれなりと考えるのも活動、仕事の一種だし、呼吸をするのも活動だよ。活動をやめることなんかできるものか。だから、めいめいの仕事をして——けれども、その結果は神様に差し上げる事だ」

モニ「はあ、では、金をもっと儲けようと思つて努力してもよろしいのですか？」

聖ラーマクリシュナ「明知の生活のためなら、そうしてもいい。収入を増やすために努力するのは結構、ただし、正直なやり方だよ。金を稼ぐのが人生の目的じゃない。神様に仕えるのが人生の目的だからね。金も神様にお仕えるために使うなら、そんなお金なら何も悪いことはないさ」

モニ「はあ、それで、家族のために働かなければならないのは、いつまででございますか？」

聖ラーマクリシュナ「女房や子供が衣食に不自由なく暮らしていけるまでだ。けれど子供がすっかり大きくなつたら、もう面倒をみる必要はないよ。鳥のヒナが、自分で餌を拾うことをおぼえた後は、もう母鳥のそばに餌をもらいにきてても、母さんは突つき出すよ」

モニ「仕事とか義務とかいうものに、人間はいつまで縛られていなくてはならぬものでしょうか？」
聖ラーマクリシュナ「果物を獲るときは、花はもうついでない。神をつかめば、活動はもうしなくともいい。そういう気持ちにもならないよ。」

酔っ払いの場合でも、酒をうんと呑んだときは正気がなくなる。二、三杯くらいでは何とか用事も足せるがね！ 神様に近づけば近づくほど、あの御方は仕事を減らして下さる。何も心配することはないよ。家庭では嫁が妊娠すれば、姑さまはだんだん家の仕事を減らしてくれる。十ヶ月目になると全然仕事をさせない。赤ん坊が生まれたら、それだけを抱いて子守っていればいい。

しなけりやならぬ仕事があるなら、ちゃんとやり遂げれば気が楽になる。主婦が料理その他の家事をすつかり終えて沐浴に行くときは、後からいくら怒鳴って呼んでも戻ってこないよ」

〔神をつかむ、あるいは神を見るときはどういうことか？ その方法は？〕

モニ「それでは、あの、神をつかむ、体得するとは、どういう意味なのでございますか？ それから、神を見るときか、対面するとかおっしゃいますのは、どういうことなのでしょう？ どうすれば出来るのでございますか？」

聖ラーマクリシユナ「ヴィシユヌ派の人たちはこう言っている。神への道を進んでいる人びとや、もう神を体得した人たちにはそれぞれの段階があると。つまり、プラヴァルタカ(初心者)、サーダカ(修行者)、シツダ(成就者)、それからシツダのシツダ(完全成就者)。道を上がり始めたばかりの人をプラヴァルタカという。礼拝祈禱の修行をして、つまりお祈り、称名、瞑想、讚神歌の詠唱などをしている人がサーダカだ。神様がいらっしやるということを、直観と知性ではつきりと認めている人をシツダというのだ。ヴェーダーンタ派のよくいう喩えだが、真暗な部屋で主人が横になっている。誰かが主人を

手さぐりで探している。寢床の端に手でさわって言う——「これじゃない」。窓枠にさわって言う——「これじゃない」。戸にさわってまた——「これじゃない」と言う。「ちがう、ちがう、ちがう、ちがう」。最後に主人の体にさわったとき言う——「ここだ」。これが主人、つまり主人がここにいることがわかる。主人をつかんだが、まだ特に親しく知り合ったというわけではないよ。

それからもう一つ、シツダのシツダというのがある。もし、主人と特別親しく話し合うことができたら、これはまた別な状態というものだ。愛と信仰を通して、神様と親しく語り合うようになったらね。神様にすっかり受け入れられたシツダ——神様と特別親しく語り合っていないさる御方を、シツダのシツダと言うのだ。

だが、あの御方をつかんだら、一つの決まった態度をとらなけりゃいけない。シャーンタ、ダーシヤ、サツキヤ、ヴァツツアリア、マドウラのどれかだ。

シャーンタ（静かな）——これは古代の見神者たちの態度。かれらは外に何の楽しみも望まない。ちよど妻が夫に身も心も捧げているようなもので——自分の主人がカンダルバ（カーマデーヴァ、愛の神）だということを知っているのだ。

ダーシヤ（献身的な奉仕）——ハヌマーン（ラーマの信者で猿の英雄）のような態度。主ラーマの御用をするときはライオン並みになった。立派な妻にもこの気持ちがあるもので、命がけて主人に仕える態度だ。母親の中にもいくらかこんなのがあつた。ヤシヨード（クリシユナの養母）がそうだったよ。

サツキヤ（友愛の）——友だちの態度だ。さあおいで、そばにきて坐っておくれ。シユリー・ダーマ

たちは主クリシユナに自分たちの喰いかけの果物を食べさせたり、取っ組み合いをしたりした。

ヴァッツアリヤ(母の子に対する態度)——ヤシヨーダーの態度だ。妻にも幾分この気持ちがある。——自分の生命をへずつても主人を養うという。子供が満腹するまで食べたときはじめて、母親は満足する。ヤシヨーダーはクリシユナに食べさせようと、出来立てのバターを持ってあちこち歩き廻つたものさ。

マドウラ(甘く楽しい)——(主クリシユナに対する)聖マティー(ラーダー)の態度。妻もマドウラの気持ちをもつ。この態度の中には、ほかの態度もすべて入っている——シャーンタも、ダーシャも、サツキヤも、ヴァッツアリヤも」

モニ「神を見るという場合、この眼で見えるのでございますか？」

聖ラーマクリシユナ「あの御方は肉眼では見えない。修行を続けていると、愛の体とでもいうようなものが出来てくるのだ。——そして愛の眼、愛の耳もね。その愛の眼であの御方が見えるし、その耳であの御方の声がきこえてくる。その上、愛のリング(男性生殖器)やヨーニ(膈)まで出来るのだ」

この言葉をきくと、モニはついハッハッハと吹き出してしまった。タクールは気にもかけずに話し続けられる。

聖ラーマクリシユナ「この愛の体で真我アイトマンと交わるのだよ」

モニはまた厳肅な態度に戻った。

聖ラーマクリシユナ「神に向かって猛烈な愛情を持たなければ、そんなふうにはならないよ。猛烈

に好きになれば、四方八方いたるところに神が見えてくる。黄疸がひどくなれば、そうするとあたり一面が黄色く見えてくるようなものだ。

そのときは、あの御方がわたしだ」という感じになる。酒呑みがひどく酔っ払うと、『このおれさまがカーリーだ』と言うだろう。

ゴーピー（牛飼）たちは愛に夢中になって、『この私がクリシュナだ』と叫びだした。

あの御方を夜となく昼となく思っている、あの御方があたり一面に見えてくる。ランプの炎をじっと見つづけてしばらく経つと、四方八方が炎だらけに見えてくる」

〔神を見ると言うのは脳神経の錯覚か？ 疑心がある者は滅びる^(キトラー4:40)〕

モニは内心で、「それは、本当の炎ではない」と思った。

タクルは内なる指揮者^{アンタルヤミシ}であられる。

「意識そのものを思っていれば意識を失うことはない。シヴァナートが、『百回、神のことばかり考えていたら、頭がおかしくなる』と言ったから、私はかれに言ってきかせたよ。至高意識そのものを想念しているのに、どうして無意識になるんだい？ とね」

モニ「そうですね、わかります。一時的な、すぐ変化したり滅びたりするものを想念するのではないからですね？ 意識そのもの、生気^{いのち}そのものである御方に心を集中して、人間が無意識になったり知性を失ったりするはありますか？」

聖ラーマクリシュナはたいそう満足した様子で、

「これは神様のお恵みだよ。あの御方のお恵みがなくては、疑いは晴れないものだ。真我アトマンに對面しないで、疑いや迷いは心からすつきり晴れないものだ。

あの御方のお恵みがあれば、もう何一つ恐れるものはない。父親の手をつかんでいても、子供は転ぶことがあるよね？ だけど、父親が子供の手をしっかりとつかんでいたら、もう大丈夫なんだ。神様のお恵みがあつて、疑いや迷いが消え、そのうえご對面下さつたなら、もう何一つ苦しみや悩みはない。だから、あの御方に届くように、ありつたけの力で呼び続ける——つまり修行を熱心に続けていれば、お恵みがいただけるわけだよ。子供がハァハァ言いながらあちこちかけ廻つて探すのをみると、母親は可哀想に思う。隠れていたんだが、出てきてやる」

あの御方は、どうして我々をかけずり廻らせるのだろうか、とモニはいぶかる。——タクルは、すぐ察して話される。「しばらくの間、かけ廻らせるのが神の御意おこころだ。だから面白いんだよ。あの御方は、遊戯リプレイのためにこの世界をお創りになつたのだ。これがマハーマヤーマ(大いなる現象、又は幻象)と呼ばれているのだ。だから、その、力エネルギーと美と愛そのものである大実母マにすがつて護っていたくんだよ。マヤーの足枷あしかせにつながれているんだから、この足枷あしかせを切りさえすれば神様にお会いできるのだ。

〔根元エネルギー、マハーマヤー及びシャクテイ派の修行〕

聖ラーマクリシュナ「あの御方のお恵みをいただくこうと思うなら、美しいアディヤシャクテイ(宇

宙根源造化力)のあの御方をなだめ、喜ばせることだ。あの御方がマハーマヤーなのだ。世界を虜とりこにして、創造し、維持し、破壊をしていらつしやる。あの御方が無智にしておきなさるのだ。そのマハーマヤーの戸を開けてもらえば奥に入れる。外にいるから外のものばかりしか見えないんだよ。あの永遠のサツチダーナンド(実在・智慧・歓喜)が人間には理解できないんだよ。それで、プラーナにはこんな話がでている——チャンデー章に。マドウ、カイタバなどの悪魔を殺すとき、ブラマーなどの神々はマハーマヤーを誉め讃えて祈りなすつた。(原典註)

シヤクテイ(造化エネルギー)こそが世界の根源もとなのだ。その根源シヤクテイのなかには、明知ヴァイディヤと無明知アヴィディヤの二つがあつて、無明知で迷わす。無明知から女と金がでてきて、迷わして虜とりこにするのだ。明知から、信仰バクティ、慈悲心ダヤ、智慧ジュニヤナ、神聖な愛プレームがでてきて、神への道に連れていく。

その無明智はなだめなければならぬ。それで、シヤクテイを礼拝する方法みちもある。その御方をなだめるために色々なやり方があつてね——女中の態度、英雄の態度、子供の態度がある。英雄の

(原典註)

あなたは真言スヴァハー、真言スヴァダー、そして供儀の真言ヴァシャット
あなたは不滅の甘露、永遠の一者、三重の聖音サウミ

(スヴァハー——真言の最後に唱える音節、スヴァダー——祖先靈に供養する時に唱える音節、ヴァシャット——護摩を焚く前に唱える音節)

——デーヴィー・マハートミヤ 第一章 五十四節 ——

(二八八四年十月十一日に全訳あり)

態度というのは、つまり、性交を通じてあの御方をよるこぼせる方法だ。

シャクティ礼拝の修行はみな、想像もできないほどむずかしいし、耐えがたい修行でね、とてもいいかげんな覚悟じゃできない。

私は大実母に対して、女中の態度と女友達の態度をとって二年間通したものだ。わたしの場合はしかし、子供の態度がよくて、女の乳房はみな母親の乳房だと思っているよ。

女というものは、一人ひとりがシャクティの姿なのだ。西の方では結婚式するとき、花婿は手にナイフを持っているし、ベンガル地方ではクルミ割りを持つ。つまりシャクティを像った処女の助けをかりて、花婿はマーヤーの絆を切ろうというわけなんだよ。これが英雄の態度。わたしは英雄の態度で拜まない。わたしのは子供の態度だ。

花嫁はシャクティの似像だ。結婚式のとときよく見るだろう？ —— 花婿がマヌケた顔で隅っこで坐っているのを。だが、花嫁は何の恐れ気もなく堂々としている」

〔見神の後は外の飾りを見ない —— 種々の知識、世間知 —— 宗教と科学〕
—— サットヴァ的知識とラジャスの知識

「神を体得んだら、あの御方の外まわりのすばらしい飾りや、あの御方のつくった世界の豊かさのことは忘れてしまう。あの御方に会ったら、あの御方の威力のことはもう気にならない。神の歓びにとつぷり浸かった信者は、もう何の勘定もしない。ナレンドラに会ったら、お前の名前は？ とか、お

前の家はどこだ。なんて質問する必要はない。つまり質問をするヒマが惜しいよ。ハヌマーンに誰かが訊ねた。『今日はどういう日でしたっけ？』ハヌマーンは答えた。『同胞、私は日のことも、星占いのことも何も知らないよ。ただラーマのことだけ考えている』」